研究紀要　６９５

令　和　７　年　度

中学校外国語科における実践研究

―諸調査結果等を活用し、課題を解決するための効果的な指導法についての提案―

仙　北　中　学　校　　八重樫　千　晶
乙　部　中　学　校　　小　野　　建
松　園　中　学　校　　竹　原　祝　子
下　小　路　中　学　校　　藤　田　和　也
学校教育課指導主事　　千　田　幸　範

令和８年１月
盛岡市教育研究所

目 次

Ⅰ　研究主題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅲ　研究の目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅳ　研究の計画

　１　英語力向上について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

　２　検証方法について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅴ　研究の組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅵ　研究の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅶ　研究の実際

　１　令和５年度全国学力・学習状況調査の結果　・・・・・・・・・・・・ 2-4

　２　教科に関する調査の考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-8

　３　質問紙調査に関する考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

　４　バックワードデザインによる指導と評価の一体化　・・・・・・・・・・ 8

　５　実践研究を検証する生徒質問紙　・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

　６　実践研究１　話すこと（やりとり）　・・・・・・・・・・・・・・・10-13

　７　実践研究２　読むこと　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14-17

　８　実践研究３　書くこと①　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18-21

　９　実践研究４　書くこと②　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

Ⅷ　研究のまとめ

　１　実践研究の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

　２　「話すこと」に係る実践研究　/ 小野研究員　・・・・・・・・・・・23

　３　「読むこと」に係る実践研究　/ 竹原研究員　・・・・・・・・・・・23

　４　「書くこと①」に係る実践研究 / 藤田研究員　・・・・・・・・・・・23

　５　「書くこと②」に係る実践研究 / 八重樫研究員　・・・・・・・・・・23

　６　今後の発展　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

Ⅰ　研究主題

中学校英語科における実践研究
―諸調査結果等を活用し、課題を解決するための効果的な指導法についての提案―

Ⅱ　主題設定の理由

グローバル化が進み国際語として英語が果たす役割が大きくなる中、義務教育における教育の機会均等の観点から小学校高学年への外国語科が導入され６年目となった。国は、令和５年４月に全国の中学校第３学年を対象に全国学力・学習状況調査を実施。全国の公立学校 9,335 校の 893,628 名が、岩手県 149 校の 8,881 名が実施した。同年の７月に結果を公表しているが、本市中学生の正答率等を分析し課題があれば、それらを解決するための指導を構想し実践する必要があると考え、本主題を設定した。本研究では、諸調査の中でも学習指導要領との関連が明確な令和５年度全国学力・学習状況調査の結果のみを研究対象とする。

Ⅲ　研究の目標

全国学力・学習状況調査の結果から、本市中学生の課題を明らかにし、指導における言語活動と評価方法を構想、実施することで指導と評価の一体化を図り、生徒の英語力向上を目指す。

Ⅳ　研究の計画

１　英語力向上について

生徒の能力を伸長する学習を進めるために、その基本構想を次の４点について計画する。

(1) 学力・学習状況調査から

盛岡市の課題を、内容のまとまり（５領域）、評価の観点、問題形式から明らかにする。

(2) 生徒質問紙調査と学校質問紙調査から

得られたデータを基に盛岡市の課題を明らかにする。

(3) 課題を克服するための授業改善

言語活動の繰り返しを通じて資質・能力を育成することを目指す。具体的には、実際に英語を用いた言語活動の中で思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて知識及び技能が習得され、学習内容の理解が深まり、学習に対する意欲が高まるなど、三つの資質・能力が相互に関係し合いながら育成される指導を実践する。

(4) 課題を克服するための評価の改善

普段の授業はもとより、学期末評価等の総括的評価においても「思考・判断・表現」の観点に焦点を当てた理解の領域及び表現の領域における学習評価を実施するため、それらに係る学習材を４校が協働で開発し活用する。

２　検証方法について

(1)　生徒の変容の自覚に係る調査の実施

(2)　令和８年度全国学力・学習状況調査の領域毎、評価の観点毎の正答率、解答類型を見る。

Ⅴ　研究の組織

	氏　名	所　属
班　長	八重樫千晶	仙北中学校
副班長	小野　　建	乙部中学校
班　員	竹原　祝子	松園中学校
班　員	藤田　和也	下小路中学校

Ⅵ　研究の方法

１ 文献法

外国語による聞くこと、読むこと、話すこと（やりとり）、話すこと（発表）、書くことの言語活動を通したコミュニケーションを図る資質・能力育成に係る資料を収集し参考にする。

２　授業の実践

言語活動の定義を明らかにした上で、授業における言語活動と総括的評価を一体的に計画・実施する。

３　質問紙法

事前調査として、生徒が頑張りたいことについて意識調査を実施し、実践研究の後半に変容の自覚に係る調査を４件法で実施する。

Ⅶ　研究の実際

１　令和５年度全国学力・学習状況調査の結果

英語科に関する調査は３年に１回実施されることになっており、第３学年で実施。出題内容は２学年（前年度）までの学習内容である。

（１）教科に関する調査結果

領域＼正答率	盛岡市	全国	全国比(%)
全体（聞・読・書）	**40.0**	**45.6**	**87.7**
聞くこと	53.6	58.4	91.7
読むこと	46.0	51.2	89.8
話すこと やりとり	10.2	14.5	**70.3**
話すこと 発表	4.2	4.2	**100.0**
書くこと	16.1	23.4	**68.8**
知識・技能（聞・読・書）	44.3	51.5	86.0
思考・判断・表現（聞・読・書）	35.0	38.8	90.2

【表１】領域別・観点別集計結果

本研究で示す全国値は、全国の国立学校、私立学校を除いた公立学校の数値である。但し、「話すこと」の全国データだけは、国立学校と私立学校を含めた値となっている。

領域別の平均正答率は表１のとおりで、「聞くこと」「読むこと」「話すこと(やりとり)」「話すこと（発表）「書くこと」の５領域のうち、４領域において全国値を下回り、１領域が全国値と同じだった。全体の対全国比は、87.7%である。

「話すこと（やりとり）」「書くこと」の全国比が大きく落ち込んでいるにもかかわらず、観点別では「思考・判断・表現」の全国比がそれほど低くないのは、話すことの５問のうち３問が、「書くこと」の５問のうち３問が「知識・技能」の評価観点に当たるからである。

次に、問題別集計結果を領域毎に概観する。

問題番号	聞くことの領域 出題の趣旨	正答率 盛岡市	正答率 全国	盛岡市無答率
1(1)	情報を正確に聞き取ることができる	70.4	79.0	0.2
1(2)		59.6	61.4	0.1
1(3)		44.9	49.8	0.2
2	日常的な話題について、目的に応じて英語を聞き、必要な情報を聞き取る	55.6	61.1	0.2
3	日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して必要な情報を聞き取る	39.6	41.2	0.2
4	社会的な話題について、短い説明の要点を捉えることができる	51.7	54.8	0.8

1(1)(2)(3)及び２は絵を見ながら答える問題である。盛岡市の正答率は、全ての小問において全国値を下回った。全小問の無答率は低い。

問題番号	読むことの領域 出題の趣旨	正答率 盛岡市	正答率 全国	盛岡市無答率
5(1)	情報を正確に読み取ることができる	53.7	56.0	0.4
5(2)	「事実・情報を伝える」と「考えや意図を伝える」という言語の働きを理解し、事実と考えを区別して読むことができる	57.1	64.5	0.6
6	日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して必要な情報を読み取る	**29.9**	35.9	0.3
7(1)	文と文との関係を正確に読み取ることができる	50.1	59.8	0.4
7(2)	日常的な話題について、短い文章の概要を捉えることができる	**33.2**	34.7	1.0
8(1)	社会的な話題について、短い文章の要点を捉える	51.8	56.1	1.1

盛岡市の正答率は、全ての小問において全国値を下回っている。また、全て１～４の選択式であるため小問の無答率が低い。

最も正答率が低いのが問題６で、91 語からなる友達からのメールを読み、相手が示した条件に合うイベントとして最も適切なポスターを選ぶ問題。次に低いのが、問題７(2)で 160 語からなるパッセージを読み、その概要として最も適切なものを４つの中から選ぶ問題。選択肢は全て４文で構成されている。

問題番号	書くことの領域 出題の趣旨	正答率 盛岡市	正答率 全国	盛岡市無答率
8(2)	社会的な話題に関して読んだことについて、考えとその理由を書くことができる	**13.6**	19.5	**36.7**

9(1)①	未来表現(be going to)の肯定文を正確に書く	**27.5**	40.4	10.5
9(1)②	疑問詞を用いた一般動詞の2人称単数過去形の疑問文を正確に書く	**14.1**	20.9	15.9
9(2)	「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を正確に書く	**20.7**	29.0	**29.9**
10	日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書く	**4.6**	7.4	**27.1**

盛岡市の正答率は、全ての小問において全国値を下回っている。また、全て記述式であるため小問の無答率が高く、特に8(2)、9(2)、10の無答率が高い。8(2)は、読むことと書くことの複合問題であり、正答率が低く無答率が極端に高い。

なお、今回の調査では、「話すこと」に関する調査結果については全国値のみを公表することとしており、都道府県別、指定都市別の公表は行われなかった。しかし、盛岡市にデータが送付されており次のように比較できる。

問題番号	話すことの領域 出題の趣旨	正答率		盛岡市無答率
		盛岡市	全国	
1(1)	日付に関する基本的な表現を理解し、その知識をやりとりの場面において活用できる技能を身に付けている	**11.4**	19.0	**18.3**
1(2)	未来表現(be going to)を理解するとともに、その知識をやりとりの場面において活用できる技能を身に付けている	**5.6**	9.4	12.7
1(3)	疑問文の特徴を理解するとともに、その知識をやりとりの場面において活用できる技能を身に付けている	**6.9**	13.4	15.2
1(4)	日常的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を述べ合うことができる	**17.1**	16.1	**12.6**
2	社会的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を話すことができる	**4.2**	4.2	**14.4**

盛岡市の正答率は、1(4)が全国値を1ポイント上回ったが、1(1)(2)(3)は、全国値を大きく下回っている。また、全て口述式であるため小問毎の無答率が高い。1(1)(2)(3)は短答式だが、1(4)及び2は、自分の考えとその理由を述べる形式となっている。

ここまで全5領域の結果を見てきたが、盛岡市は5領域全22問のうち20の小問において全国値を下回っている。

（２）生徒質問紙調査の結果

英語科に係る質問は、59番～72番である。

質問番号	質問事項	肯定反応		差
		盛岡市	全国	
59	英語の勉強は好きですか	54.0	51.9	＋2.1
60	英語の勉強は大切だと思いますか	87.1	88.0	▲0.9
61	英語の授業の内容はよく分かりますか	62.8	63.9	▲1.1
62	英語の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役に立つと思いますか	86.2	87.5	▲1.3
63	将来、積極的に英語を使うような生活をしたり職業に就いたりしたいと思いますか	39.1	36.7	＋2.4
64	これまで学校の授業以外で日常的に英語を使う機会が十分にありましたか（外国の人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビやホームページを見る、オンラインで英語で交流する、英会話教室に通うなど）	25.9	30.0	▲4.1
65	家庭学習として、どの程度PC、タブレット等のICT器機を使って英語の音声を聞いたり英語を話す練習をしていますか	7.1	9.1	▲2.0
66	1、2 年生の時に受けた授業では、英語を聞いて1文1文ではなく概要や要点を捉える活動が行われていましたか	81.7	78.2	＋3.5
67	1，,2 年生の時に受けた授業では、英語を読んで1文1文ではなく概要や要点を捉える活動が行われていましたか	84.0	80.3	＋3.7
68	1、2年生の時に受けた授業では、原稿の準備をすることなく即興で自分の考え・気持ちを伝え合う活動が行われましたか	68.9	63.8	＋5.1
69	1，,2年生の時に受けた授業では、スピーチやプレゼンテーション等、まとまった内容を英語で発表する活動が行われましたか	83.2	78.7	＋4.5
70	1，,2 年生の時に受けた授業では、自分の考え・気持ちを書く活動が行われましたか	87.1	82.8	＋4.3
71	1，,2 年生の時に受けた授業では、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で問答したり意見を述べ合ったりする活動が行われましたか	83.8	80.7	＋3.1
72	1，,2年生の時に受けた授業では、聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりする活動が行われたと思いますか	82.6	79.3	＋3.3

プラス反応を比較すると、14項目のうち9項目が全国値を上回っている。授業以外の英語使用に係る質問64が-4.1ポイントだが、全体的に全国値より落ち込んでいるわけではない。

（３）学校質問紙調査の結果

英語科に係る質問は、49 番～59 番である。

質問番号	質問事項	肯定反応		差
		盛岡市	全国	
49	前年度までに、英語を聞いて１文１文ではなく概要や要点を捉える言語活動を行いましたか	95.7	94.2	＋1.5
50	前年度までに、英語を読んで１文１文ではなく概要や要点を捉える言語活動を行いましたか	95.6	96.1	▲0.5
51	前年度までに、原稿等の準備をすることなく即興で自分の考え・気持ちを伝え合う言語活動を行いましたか	73.9	76.8	▲2.9
52	前年度までにスピーチやプレゼンテーション等、まとまった内容を英語で発表する言語活動を行いましたか	82.6	86.9	▲4.3
53	前年度までに、自分の考え・気持ち等を英語で書く言語活動を行いましたか	**100**	**91.9**	**＋8.1**
54	**前年度までに、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で問答したり意見を述べ合ったりする言語活動を行いましたか**	**65.2**	**74.2**	**▲9.0**
55	**前年度までに、聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりする言語活動を行いましたか**	**60.8**	**75.4**	**▲14.6**
56	英語担当教員と ALT との間で、授業のねらいや活動の意図、各学級や一人一人の生徒の実態等について共通認識を持ち協力して授業を行うことができていると思いますか	91.3	94.1	▲2.8
57	全国学力・学習状況調査の調査問題や結果を踏まえて言語活動の充実等の授業改善や、定期考査問題やパフォーマンステストの改善等の学習評価の改善に取り組んでいますか	91.3	88.1	＋3.2
58	英語の授業以外にも生徒が英語に触れる機会（イングリッシュキャンプ、English Day、昼の英語の放送等）をどの程度設けていますか	4.3	8.6	▲4.3
59	家庭学習として、生徒に PC、タブレット等の ICT 器機を使用して英語の学習をどの程度行わせていますか	13.0	14.0	▲1.0

11 の質問のうち、全国値を上回っているのが 3 項目で、特に高いのが質問 53 の 100%。下回っているのが 8 項目。一方、特に落ち込んでいるのが質問 55。また、全国値と同様に極端に数値が低いのが質問 58（盛岡市 4.3%）。気になるのは次の２点である。

① 【55】「聞いたり読んだりした内容を英語で書いてまとめたり、自分の考えを英語で書いたりする活動は行われている」が、60.8%と全国値より 14.6 ポイントも低い。
【問題との関連】 **だから、**大問 8(2)が低い
【盛岡市の現状】 正答率：13.6%（全国 19.5%）
無答率：36.7%（全国 28.9%）

しかし、注目すべきは次である。

②【53】「自分の考え・気持ちを英語で書く活動は行われている」が、100%と全国値を 8.1 ポイント上回っている。
【問題との関連】 **なのに、**大問 10 が低い
【盛岡市の現状】 正答率： 4.6%（全国 7.7%）
無答率：27.1%（全国 20.9%）

この数値から、盛岡市では書くことの指導法に課題があると言える。

２　教科に関する調査の考察

（１）「聞くこと」について

問題１(1)(2)(3)は、話される英語の意味がわかれば正答を選ぶことができるが、問題２は、目的に応じて英語を聞き、問題３は、自分の置かれた状況から判断して必要な情報を、問題４は、話し手の最も伝えたい内容（要点）を聞き取れなければならない。このように問題２、３、４は「思考・判断・表現」の観点に係るものだ。正答率の最も低い(39.6%)問題３をみる。

【問題３の指示】
あなたはイングリッシュキャンプに参加しています。これから、２班のリーダーとして明日のバーベキューパーティーについて説明を聞くところです。説明を聞いたあと、質問が放送されます。質問の答えとして最も適切なものを、下の１から４までの中から１つ選びなさい。解答時間は 20 秒です。それでは始めます。

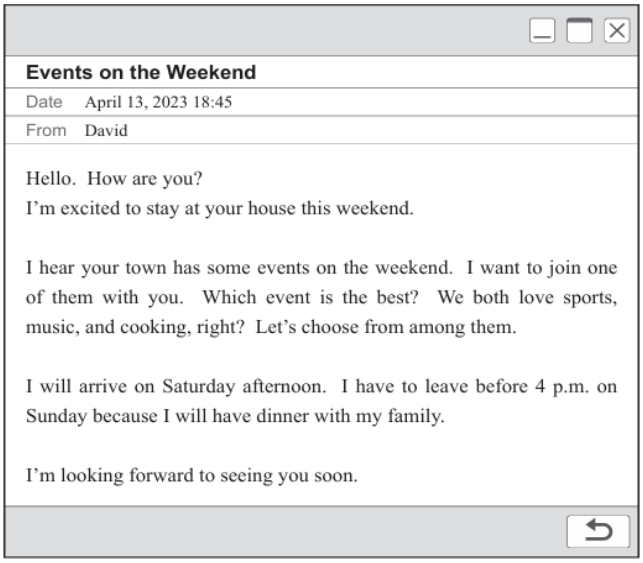
【問題３の英語スクリプト】
Tomorrow, we will have a barbecue party. We have three groups. Each group has a job. Group leaders, don't forget to tell your group members about your group's job. Group 1, can you make the fire and cook rice? Groups 2 and 3, please cut the vegetables together. After you finish cutting the vegetables, Group 2 cut the meat, and Group 3 set the tables for all the groups. Do you have any questions? If you have any questions, please ask me later.

Question: What is your group's job at the barbecue party?

この問題は、「２班のリーダーとして説明を聞く」という状況を理解した上で全 93 語からなる英語を聞き取らねばならない。質問が後から流れたことで「何を聞き取らなければならないのか」が意識されないまま聞いてしまった生徒が多いと思われる。日頃から英語を聞く際には、目的、場面、状況を確認し、必要な情報は何かを考えさせる習慣を付ける必要がある。

（２）「読むこと」について

全６問のうち正答率が 30％前後だったのが問題６と問題７(2)であり、どちらも思考力、判断力を要する問題である。問題６を見てみる。



Events on the Weekend

Date　April 13, 2023 18:45

From　David

Hello. How are you?
I'm excited to stay at your house this weekend.

I hear your town has some events on the weekend. I want to join one of them with you. Which event is the best? We both love sports, music, and cooking, right? Let's choose from among them.

I will arrive on Saturday afternoon. I have to leave before 4 p.m. on Sunday because I will have dinner with my family.

I'm looking forward to seeing you soon.

1 **Rugby Game**
Let's watch together!
Date & Time
Saturday, April 15
9:30 a.m. – 11:30 a.m.
Place
Midori Park

2 **Flower Market**
You can buy beautiful flowers!
Date & Time
Saturday, April 15
9:00 a.m. – 4:00 p.m.
Place
Hikari Garden

3 **City Orchestra**
You can enjoy a wonderful performance!
Date & Time
Sunday, April 16
1:00 p.m. – 3:00 p.m.
Place
Tsubomi Hall

4 **"Cook & Eat"**
Let's enjoy cooking and eating!
Date & Time
Sunday, April 16
4:00 p.m. – 7:00 p.m.
Place
Cooking Room "Wakaba"

この問題の指示文は次の通りである。

> 次の英文は、友達のデイビッド（David）があなたに送ったメールです。メールを読んで、デイビッドにおすすめのイベントとして最も適切なものを、右の１から４までの中から１つ選びなさい。

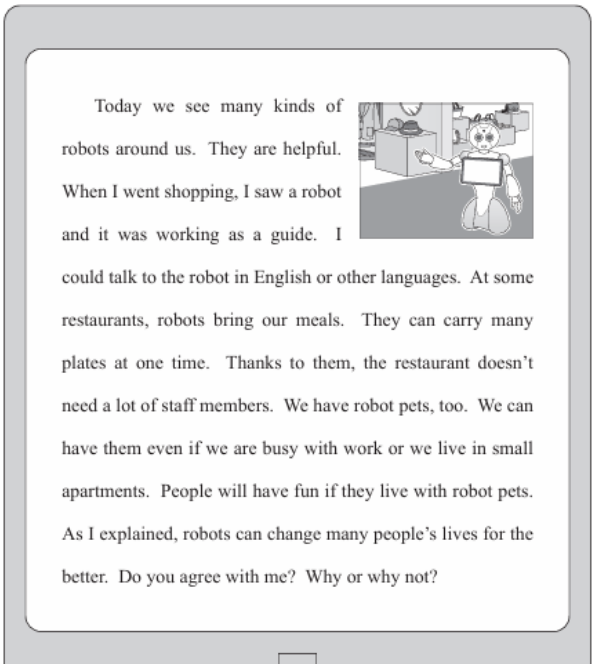
メールから読み取った情報を基に相手に勧めるイベントを選択する問題であり、盛岡市の正答率は 29.9％。解答類型と反応率を見ると「４を選んだ全国公立学校生徒」の反応率が 35.6％。このことから、多くの生徒が文全体の意味ではなく、「sports, music, cooking」や「4 p.m. on Sunday 」等の一部の単語を表面的に読み取り答えたと思われる。

授業においては、状況設定を確認せずに、ただ文章を読ませて逐語的な意味理解を求めるのではなく、場面を確認し、自分が置かれた状況を確認し、書き手がどのような情報を伝えようとしているのか、どのような情報を読み取るべきかを意識させて読ませる指導が求められる。

（３）「書くこと」について

全５問の盛岡市の平均正答率は 16.1％。3 問が「知識・理解」、2 問が「思考・判断・表現」に係る問題である。今回の全国調査 17 問中、2 番目に正答率の低い（13.6％）問題 8(2)をみる。

8　英語の授業で、ブラウン先生が作成した文章が学習者用端末に送信されました。これを読んで、以下の問いに答えなさい。



Today we see many kinds of robots around us. They are helpful. When I went shopping, I saw a robot and it was working as a guide. I could talk to the robot in English or other languages. At some restaurants, robots bring our meals. They can carry many plates at one time. Thanks to them, the restaurant doesn't need a lot of staff members. We have robot pets, too. We can have them even if we are busy with work or we live in small apartments. People will have fun if they live with robot pets. As I explained, robots can change many people's lives for the better. Do you agree with me? Why or why not?

メール文の下に未習語扱いの語注が次のように示されている。

（注）plate：皿　　even if ～：たとえ～だとしても
apartment：アパート　　agree with：～に賛成する

この問題の指示文は次の通りである。

英語の授業で、ブラウン先生が作成した文章が学習者用端末に送信されました。これを読んで、以下の問いに答えなさい。

なお、関連して、8(1)の設問は、「読むこと」であり盛岡市の正答率は 51.8%。このように、大問８は、「読むこと」と「書くこと」の複合問題である。

8(2)の設問が、「書くこと」であり、盛岡市の正答率（13.6%）に加えて、無答率（36.7%）が 17 問中最も高かった。実際の設問をみる。

（2）ブラウン先生の質問に対するあなたの考えと理由を英語で簡潔に書きなさい。

この問題では、社会的な話題に関して読んだことについて、Do you agree with me? Why or why not?の問いに対し「自分の考え」と「理由」を書く問題である。語数の制限はない。考えを述べることができても理由まで書けない生徒が 27.8%（全国値）おり、無回答の生徒も 36.7%（盛岡市）いるなど、「考え」と「理由」が両方書けなかった生徒が 86.4%いたことになる。語数の制限はないので、端的に理由を正確な英語で書けるように日頃から指導する必要がある。

続いて、今回の全国調査 17 問中、最も正答率の低い（4.6%）問題 10 をみる。この問題の趣旨は、「日常的な話題について事実や自分の考え等を整理し、まとまりのある文章を書くことができる」であった。盛岡市の無答率は、27.1%と今回の 17 問中 3 番目に高かった。

10　あなたの学校では、学校の英語版ウェブサイトを公開しています。あなたは、そのサイトに学校紹介文を掲載することになりました。学校生活（行や部活動など）の中から紹介したいものを１つ取り上げ、それについて説するまとまりのある文章を 25 語以上の英語で書きなさい。

※　短縮形（I'm や don't など）は１語と数え、符号（ , や ? など）は数に含めません。

（例）　No,　　I'm　　not.　【３語】

これは、まとまりのある 25 語以上の文章を書く問題である。自分の経験や考えを書けるようになるためには、自由作文の機会を授業の中に多く設定することが必要である。書く内容が充実するよう、「考え」を書いたら「その理由」を書くことを基本とし、内容を深めるための文を加えることや、導入（書き出し）→展開（内容）→結論（まとめ）の順に正確な英語で書かせることを習慣化させる必要がある。

（４）「話すこと」について

全 5 問の盛岡市の平均正答率は 10.2%。全国値（国公私立）は、14.4%である。

1(1)(2)(3)は短答式であり、評価の観点は「知識・技能」である。この部分に着目すると全国値を 100 とした場合、盛岡市は 56.9 と極端に低い。

1(4)及び２は記述式であり、評価の観点は「思考・判断・表現」である。盛岡市の対全国比は 104.9。１つの領域で「知識・技能」が極端に低く、「思考・判断・表現」は全国より高いという結果となった。

実際のスクリプトは、次の通りである。

「話すこと」調査の問題は５問あります。問題音声が流れる回数は、全て１回です。解答は、全て英語ではっきりと話してください。

大問１　あなたは、オーストラリアからの留学生ソフィアのために動物園へ行く予定をたてました。今日がその当日です。会話が続いていくように、質問に答えたり、あなたの考えを伝えたりしましょう。指示がある場合は、その指示に従って答えましょう。問題は（１）から（４）まであります。解答時間は（１）から（３）が７秒、（４）が 20 秒です。それでは、始めます。

（１）A baby elephant!　How cute! ... I can read some Japanese. Its name is Taro... it's a boy... and, what does this say?
（解答時間７秒）

（２）I was so excited to see the baby elephant.　So, what are we going to do next?
（解答時間７秒）

（３）Look! Kangaroos! They are really famous in my country, Australia. I know a lot about them. Do you have any questions about kangaroos? Please ask me.
（解答時間７秒）

（４）I want to buy a gift for my host brother. He is only 4 years old. Which one should I buy for him, a picture book, animal cookies or a T-shirt? And why do you think so?
（解答時間 20 秒）

これが１(1)(2)(3)(4)のスクリプトだが、音声が流れる回数は１回である。

(1)の盛岡市の正答率が 11.4%。When is his birthday?と直接何を答えたらよいかわかる問題とは異なり、What does this say?と留学生が読み取れなかった情報が何かを判断し、答えなければならなかったことが低い要因と考えられる。His birthday is March first.が正答で、His birthday is a March first.を準正答としている。解答類型３の「Birthday is March is first.」のような伝達上他者に通じるかもしれないが、文法事項の誤りがあるものは誤答とされた。

(2)の盛岡市の正答率が 5.5%。この先の予定を尋ねられ、絵を見て答える問題。問題の意図が理解できていない生徒、問題の意図に合った表現が使えない生徒が多かったと推察する。

(3)の盛岡市の正答率が 6.9%。絵を参考にカンガルーの食べ物について尋ねる問題。What food do they eat?が正答で What food do kangaroo eat?や、What is kangaroo eating?が準正答となっている。解答類型３「What food kangaroo eat?」の助動詞の脱落や、「What they do eating?」の語順等に誤りがあるものは誤答とされた。盛岡市の課題と言える「話すこと」の「知識・理解」について、尋ねたり尋ねられたりする活動において、その場限りのドリル練習だけで正確性を高めようとするのではなく、日頃の生徒同士のやりとりや教師とのコミュニケーションの中で正確性を高める必要がある。

(4)の盛岡市の正答率が 17.1%。聞き取った情報を基に、ホストブラザーに買うべきお土産を選び、選んだ理由を答える問題。

【正答例】You should buy a picture book. He can learn about a lot of animals.

多くの生徒が買うべきお土産までは答えることができている。その一方で、その「理由」を答えられない生徒の割合が 49.5%(全国値)と高い。この傾向は、「書くこと」の８(2)と同じである。

このことから、授業においては、聞いたり読んだりしたことについて自分の「考え」を述べる機会を設けるとともに、その「理由」も付け加えることが習慣となるよう継続的に指導することが大切と考える。

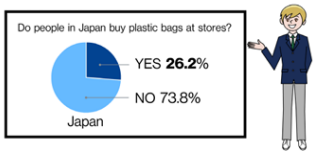
問題２は、評価の観点が「思考・判断・表現」に係るもので、問題形式は「記述式」の扱い。盛岡市の正答率は 4.2%で全国値（国公私立）と同じである。盛岡市の無答率は 14.4%で、全国値の 18.8%よりも低く好ましい結果となっている。

実際のスクリプトを見てみる。

大問２　英語の授業で、ニュージーランドから来た留学生が環境問題についてのプレゼンテーションをしています。その発表やスライドの内容をもとにして、あなた自身の考えとその理由を英語で伝えましょう。１分間話す内容を考えたあと、30 秒で話してください。メモを取ってもかまいません。それでは、プレゼンテーションを聞きましょう。

Do you buy plastic bags at the store? Or, do you use eco bags?

Look at this picture. There are many plastic bags in the sea. It is a serious problem today.



Now, look at this. I was really surprised to see this because over 25 % of people in Japan buy plastic bags at stores. In New Zealand, stores do not sell plastic bags and we take eco bags.

Some people may say plastic bags are becoming more eco-friendly, but I recommend stores in Japan should stop selling plastic bags. What do you think?

それでは、話す内容を考えましょう。（考える時間１分）

それでは、30 秒で話してください。（解答時間 30 秒）

この問題に正答するためには、①プレゼンテーションの内容を理解する、②話し手の意見に対する自分の考えを述べる、③自分の考えの理由・根拠を述べる、という３つの段階をクリアしなければならない。多くの生徒が話し手の意見を理解できなかった、または、理解できても考えや理由を話すための表現が身に付いていなかったと推察する。

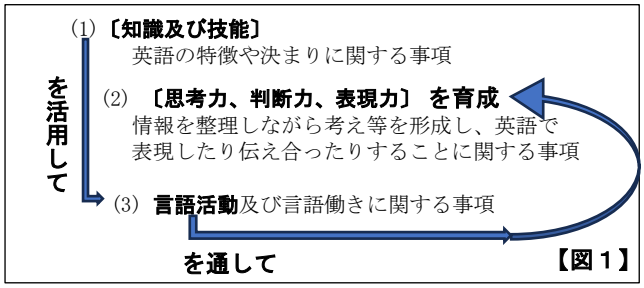
この問題の趣旨は、「社会的な話題に関して聞いたことについて、考えと理由を話すことができるかどうかをみる。」であり、そもそも、第２学年の３学期末までの授業において「社会的な話題」について自分の考えをまとめ、英語で伝える活動をしていないと、このような問題には対応できない。背景知識や関連語彙力が求められるため、段階的で地道な指導が必要である。

３　質問紙調査に関する考察

学校質問紙調査では、言語活動について８つの質問事項が設定され、盛岡市の数値が質問 53 の「自分の考え・気持ち等を英語で書く言語活動」で 100%と高く、質問 54 の「聞いたり読んだりしたことについて、英語で問答したり意見を述べ合ったりする言語活動（-9%)」、質問 55 の「聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり、考えを英語で書いたりする言語活動(-14.6%)」で落ち込んでいることがわかった。

表現領域においても、理解領域においても評価する際には、前提条件として言語活動に取り組ませていなければならず、言語活動に取り組ませていなければ適切な評価はできない。

そこで、そもそも「言語活動」とは何なのかをここで確認しておきたい。学習指導要領解説（外国語編）の pp119-121 を読むと、次の図１のように構造化できる。このことから、次のように定義できる。



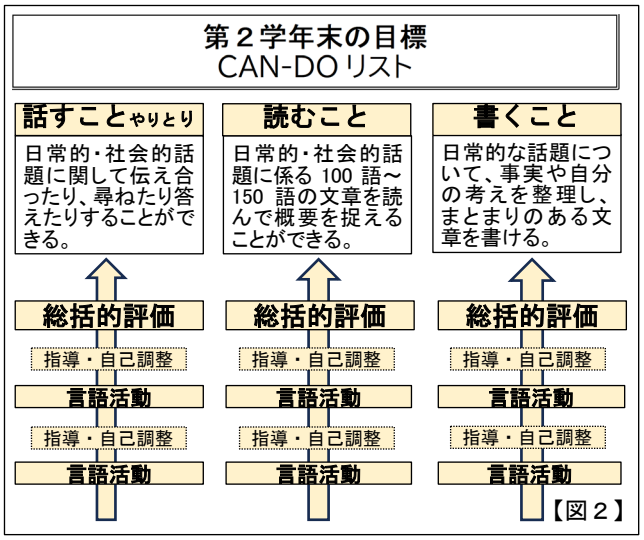
【図１】

【言語活動の定義】
知識・技能を活用し、思考力、判断力、表現力等を育成するために取り組ませるもの

では、思考力、判断力、表現力等を育成するために盛岡市の学校では、生徒達に表現内容を考えさせているだろうか。その内容を英語でどのように表現すればよいかを生徒自身に考えさせているだろうか。表現集、ヒントカード、フレーム、対話のフォーマットを与え過ぎていないだろうか。教師が振り返ってみる必要がある。

４　バックワードデザインによる指導と評価の一体化、並びに自己調整の繰り返し

話すこと（やりとり）の指導の際、「語彙や文法を身に付けてから表現するという指導観から脱却し、まずコミュニケーションから入り、その中で気付きや必要性を感じさせながら知識・技能を習得させていこう」という指導観が正しいとして、その後に、文法の指導を十分に行ってこなかったという反省は、盛岡市の英語教員にないだろうか。



【図２】

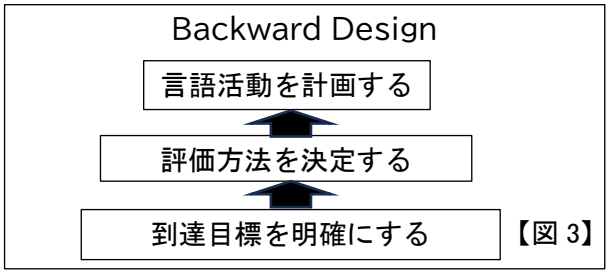
問題 8(2)の 13.6%、10 の 4.6%という正答率の低さや、誤答傾向から「準備→練習→発表」の学習過程にとどまらず、知識・技能がきちんと活用されているかどうかを確認するために単位時間や単元の中で「言語活動→指導・自己調整→言語活動」の繰り返しがある計画立案することが必要だ。そこで、Ⅶの１、２を踏まえ、本実践研究では「読むこと」「書くこと」「話すこと」を

取り上げ、図２のイメージで取り組む。

指導と評価の一体化を図る観点から、ゴールとしての総括的評価の時期・内容を決め、それに向けて学習過程に言語活動を位置付ける。その際、知識・技能に係る学びの場を設定したり、自己調整（修正）させたりすることで言語形式の正確性を高める。

従来は、生徒の実践的コミュニケーション能力を高めるために言語活動の内容・回数・授業における位置づけ等を検討し、授業実践を継続し、その指導成果を検証するために、NRT、総合問題（業者テスト）の全体正答率や英語検定合格者の数値により、指導の妥当性を客観的に吟味していた。それらのテストは、公立高校入試問題の形式を意識したものであったり、経年変化を見るために大胆な出題方法の変更をせずに現在に至っているものであったり、膨大な評価結果を処理するために４択問題が大多数を占めていたり、多種多様な形式から成り立っている。これらは、テストの前提条件としての「信頼性」「妥当性」「客観性」は担保されており、学習指導要領との関連性という点において何ら問題はないのかもしれない。しかし、本研究が扱う国による学力調査問題と見比べると出題の手法が異なるものもある。

そこで、ゴールとしての総括的評価を実施するに当たり、学習指導要領との関連が明確な国による全国学力調査問題の形式に学び、仙北中学校、松園中学校、下小路中学校、乙部中学校の４中学校が協働で学習材や評価問題を作成し、授業実践に活用することでバックワードデザインによる指導と評価の一体化を実現しようとするものである。バックワードデザインとは、図３のような指導の構築である。



【図 3】

研究員による班会議において、次の評価問題等の作成、活用に取り組むことを確認し合った。

① speaking（interaction）
話すこと（やりとり）のトピック選定と自己調整等の履歴を蓄積できるシート
【乙部中・小野研究員】

② reading
社会的話題等の読むことの学習教材集
【松園中・竹原研究員】

③ writing
まとまりのある文章を書かせるシート集
【下小路中・藤田研究員】

④ コミュニケーション力を支える grammar
肯定文や疑問文を正しく書くための小テスト集
【仙北中・八重樫研究員】

５　実践研究を検証する生徒質問紙

実践研究を進める上で生徒にどのような変化が生ずるのか、データを収集するための質問紙を予め作成する必要がある。次が質問項目であり、４件法により実施する。

	質　問　項　目
1	友達と英語で対話をする時、以前よりも正しい英語を使用するよう意識するようになった。
2	友達と英語で対話をする時、事前の準備をしなくとも以前より、Where～？Why～? What～? Did you～?How～?等で相手に質問できるようになった。
3	友達と英語で対話をする時、以前よりも「I see.」「Really?」やエコーイングで相手の発言を受け止めることができるようになった。
4	まとまりのある英語を読む時、以前よりも短時間に「概要をとらえることができるようになった。
5	まとまりのある英語を読む時、以前よりも「要点や筆者の主張」を意識して読むようになった。
6	まとまりのある英語を書く時、「メモ」→「英訳」→「簡単な日本語に修正」→「英訳修正」の手順が以前よりも短時間でできるようになった。
7	まとまりのある英語を書く時、「書き出し」「展開」「結論」の順で書けるようになってきた。
8	まとまりのある英語を書く時、以前よりも「主語＋動詞の語順」「動詞の形」「助動詞＋動詞の原形」「名詞の単数形・複数形」等を意識して書くようになった。
9	文法プリントに取り組んだことで、以前よりも、文の中で動詞や形容詞を正しい形で使用できるようになった。
10	文法プリントに取り組んだことで、英語を話したり、書いたりする時に、以前よりも正しい英語を使用できるようになった。

ここまでが実践研究の第一段階である。次の段階で具体的な実践研究を紹介する。

実践研究１　話すこと〔やりとり〕

学習指導要領との関連：　関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合う。
全国学力調査との関連：　1（１）（２）（３）

１　はじめに

この問題の趣旨は、「やりとりの場面において、即興で伝え合うことができるかどうかみる」であった。「即興で伝え合う」とは、不適切な間を置かずに相手と事実や意見、気持ちなどを伝え合うことである。

問題番号	話すことの領域 出題の趣旨	正答率		盛岡市 無答率
		盛岡市	全国	
(1)	日付に関する基本的な表現を理解するとともに、その知識をやり取りの場面において活用できる技能を身に付けているかどうかみる。	**11.4**	19.0	**18.3**
(2)	未来表現(be going to)を理解するとともに、その知識をやり取りの場面において活用できる技能を身に付けているかどうかみる。	**5.5**	9.4	**12.7**
(3)	疑問文の特徴を理解するとともに、その知識をやり取りの場面において活用できる技能を身に付けているかどうかみる。	**6.9**	15.2	**15.2**

話すことの領域１(1)～(3)の盛岡市の正答率は、令和５年度調査の22問中ワースト５となる低い結果となった。即興で伝え合うためには、音声や語彙、表現、文法や言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、話すことによる実際のコミュニケーション、特にやりとりの場面で活用できるようにさせることが大切である。

当初は、「正確さよりも話す内容が充実するような指導をしたい。」と考えたが、次に示す学校質問紙調査結果を踏まえ、指導を講ずる必要があると考えスタンスを変えた。

国の報告書によると(3)の場合、令和５年度の正答の条件は、次のように示されている。

・カンガルーが食べるものについて正しく質問しているもの　◎
　例　What food do they eat?
・カンガルーが食べるものについて質問しているが、コミュニケーションに支障をきたさない程度の誤りがあるもの　○
　例　What food do kangaroo eat?

解答類型をみると、「コミュニケーションに支障をきたすような語や文法事項等の誤りがあるもの」は、誤答とされ、盛岡市の場合、24.3%が誤答とされた。このことから、即興で話すことができることに加え、正確な英語で話すことができる生徒の育成を目指し授業改善に当たることとした。

２　「話すこと」のスキルアップを目指す指導改善について

（１）　取り組み方（プランニング）

取組内容、実践研究が目指すもの、授業の場面、期待する効果、指導と評価の一体化、実践の検証方法を視野に入れ、指導構想を次のように立案した。

取組内容	○　会話例文集の作成 ○　その活用
実践研究の キーワード	・英語使用の正確さ ・即興性 ・言語活動→自己調整→言語活動
授業の場面	・帯活動で授業冒頭１０分程度全３０回　　・時期：８月下旬～１２月上旬
期待する成果	◎対話をする時、以前よりも正しい英語を使用するようになった。 ◎友達と対話をする時、以前よりも、事前の準備をしなくても Where～？Why～? Did you～? 等で、相手に質問できるようになった。 ◎友達と対話する時、以前よりも「I see.」「Really?」等や、エコーイングで相手の発言を受け止めることができるようになった。
指導と評価の一体化	○パフォーマンステスト（２～３回）
実践の検証方法	・質問紙調査（４件法、文章法） ・令和８年４月の全国調査

（２） 開発教材について

今回の実践研究では、次のような教材を開発した。

題名　Let’s speak English with a smile!～留学生を受け入れよう～

状況設定　「あなたの家庭は、オーストラリアからの留学生エミリーのホームステイをホストすることになりました。あなたはお互いを知り、仲良く過ごし、エミリーに岩手や盛岡で楽しい思い出を作ってほしいと思っています。」

場面　場面１―出会い　　場面２―レストランで食事をしよう　場面３―お互いをもっと知ろう

指導のプロセス　（例　場面１－出会い）

① 留学生との出会いの場面で、生徒が質問したい内容を英語（もしくは日本語）でワークシートに箇条書きさせる。

② 生徒個々がワークシートに記載した質問を教師が集約し、「出会いの場面」用の対話例文集を作成する。（Ａ３判１枚２ページ）

③ ②で作成した「出会いの場面用の対話例文集」を生徒に配布し、読み方の確認をする。

④ 生徒同士で対話をする。留学生役、受け入れ生徒役を決める。１回 30 秒間の対話を行う。役割を交代し 30 秒間の会話をもう一度を行う。30 秒×２回を１セットとする。１分程度の１セットをペアを変えて５セット行う。１授業で 10 分程度の練習となる。

⑤ ④を 10 回程度、帯学習で行う。

⑥ ALT と JTE が評価者となり、パフォーマンステストを実施する。

＊ 場面２、３も同様のサイクルで指導。

（３）本教材の作成のねらい

① 生徒が想像し易い状況設定と場面設定

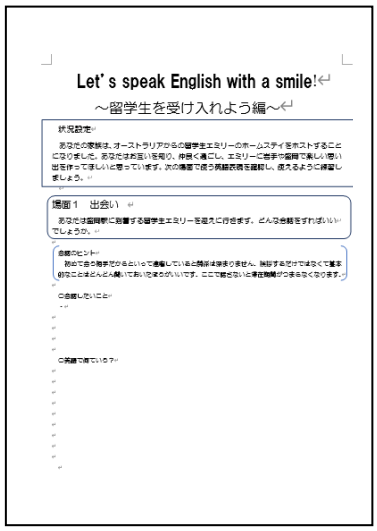
英語を話す「目的」「場面」「状況」を生徒にとって分かり易い「留学生のホームステイの受け入れ」と設定した。このことで、場面や発話の内容が生徒にとって想像し易いものとなり、生徒の取組意欲を高揚させることができると考えた。

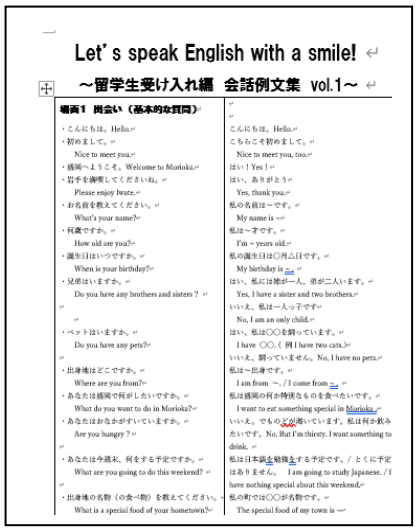
② 場面毎の質問応答集の作成、及びその活用

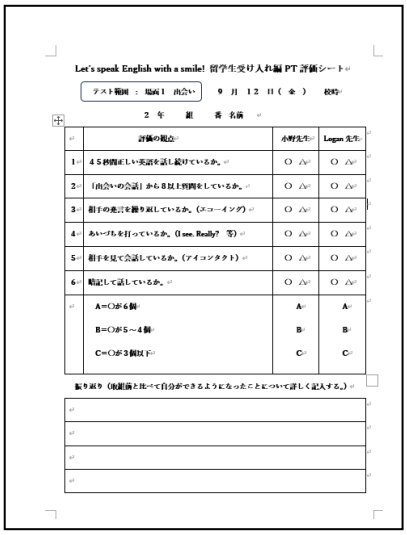
生徒が自ら質問したいと思う内容を集めた「対話例文集」を作成し活用することで、生徒の学習意欲を高揚させることができると考えた。

③ 正確な英語の使用を期して

生徒作成の質問・応答文を正確性の観点から教師がチェックし、それらをリスト化した学習材を作成し対話練習をさせることで正確な英語を身に付けさせることができると考えた。


Let's speak English with a smile!
～留学生を受け入れよう編～


Let's speak English with a smile!
～留学生受け入れ編　会話例文集　vol.1～


Let's speak English with a smile! 留学生受け入れ編 PT 評価シート

ワークシート（出会い編）　　対話例文集（出会い編）　　PT 評価用紙（出会い編）

（４）「学びを調整する中間指導」「振り返り」「指導と評価の一体化」

練習のリズムを保つために 30 秒程度の対話時間を基本とする。そのため一度に学習するトピックは限定される。ある程度習熟が図られたら、次のトピックに移行していく。場面１であれば、練習１回目～４回目は出身地を尋ねる質問あたりまでとし、５回目～８回目は、それ以降の質問をとした。９～10 回目は場面毎の例文全てを使用可能範囲とした。

生徒の定着度を確認するため、活動の途中で生徒に挙手によりモニタリングさせた。達成度に応じて補充のための中間指導をしたり、自主トレーニングタイムを設定したりしながら定着を促した。また、教師も練習に参加し、生徒がおかしがちな疑問詞や動詞の間違い等について指摘し、正確な英語の使用を手助けした。

【会話練習の様子】

指導を進めていく中で「I see.」「Really?」などの受け止めや、エコーイング等のリスナーズスキルの指導をした。このことで、発話力が高まり、対話が持続するようになると考えたからである。このように指導したあと、用紙で活動のリフレクションをさせ、頑張ったこと、向上したこと等の履歴を残して自己成長を自覚させた。

【パフォーマンステストの様子】

指導と評価の一体化を目指すパフォーマンステストは、JTE 又は ALT と生徒の１対１で実施した。場面毎に必要な複数の質問をすること、エコーイングや受け止め等のリスナーズスキルを使用できるかどうかも評価項目とした。その結果は、２学期末の「話すこと」の評価材料とした。

（５）各種調査結果とまとめ

① ４件法による定量的調査から

	事 後 調 査　　調査日：令和７年10月23日	
	◎とても上達した　○どちらかというと上達 △どちらかと言うと上達しない　×全く上達しない	◎○を選んだ プラス評価の割合
1	**【話すこと】** 対話をする時、以前よりも正しい英語を使用するようになった。	46名中46名 100％
2	**【話すこと】** 友達と対話をする時、以前よりも、事前の準備をしなくても Where～？ Why～？ Did you～？ 等で、相手に質問できるようになった。	46名中41名 89％
3	**【話すこと】** 友達と対話する時、以前よりも「I see.」「Really?」やエコーイングで相手の発言を受け止めることができるようになった。	46名中44名 96％

② 文章法による定性的評価から

今回の実践研究では、生徒に文章法による定性的評価を実施した。次がその記述である。

・ALTの先生と話すとき、止まらずに会話できた。取組前の自分から成長したと実感した。練習では相手の優れた表現を自分の会話に取り入れることができた。（上位生徒　PT評価AA）
・会話のテストは緊張したけど練習の甲斐あってたくさん質問できた。ペアでの練習では相手によって反応が違うから、その答えに応じた質問ができるようになった。エコーイングや相槌を使えるようになった。（上位生徒　PT評価AA）
・取組前は例文集を見ながらでも質問できなかったけど、友達と何度も練習していく中で覚えて話すことができるようになった。わからないところがあっても、相手がサポートしてくれたからたくさん覚えられたし、会話が好きになりました。（中位生徒　評価AA）
・最初は緊張して英語が飛んでしまったけど、何度も繰り返し練習することで英語を覚えられた。会話テストの評価項目を先生に教えてもらってから、自分ができない項目を意識して練習できたので良かった。（中位生徒　PT評価BA）
・会話練習をしていく中で相槌やエコーイングができるようになったし、相手の目を見て質問できるようになった。ペアでいろいろな人と練習したので飽きないで頑張れた。自分が出来ないところを教えてもらえたのでよかった。（低位生徒　PT評価BA）

③ パフォーマンステスト（場面１―出会い）の結果から

評価／学級	Ａ評価	Ｂ評価	Ｃ評価	備　考
２Ａ（23名）	19（82%）	4（18%）	0（0%）	・テストは、ALT及びJTEと対話形式で実施。どちらかでＡ評価となった場合、Ａ評価とした。 ・１回目はＢだが、２回目でＡにパフォーマンスが改善した生徒は、Ａ組で７名、Ｂ組で11名。
２Ｂ（23名）	20（87%）	3（13%）	0（0%）	
２学年合計（46名）	39（85%）	7（15%）	0（0%）	

上記①②③の結果から、この度の実践研究の取組では、上位生徒から下位生徒までが意欲的に学習に取り組むことができ、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合う力を付けるために有効であると分かった。また、ペアで多くの生徒同士で会話させることで互いの情報のシェアリングや教え合いが促進されることが分かった。今後は、目的、場面、状況のバリエーションを広げ、生徒たちの「話すこと（やりとり）の能力を一層向上させていきたい。

実践研究２　読むこと

学習指導要領との関連：

〇日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取る。

〇日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉える。

〇社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉える。

全国学力調査との関連：　5 (1) (2)　6　　7 (1) (2)　8 (1) (2)

１　実践研究について

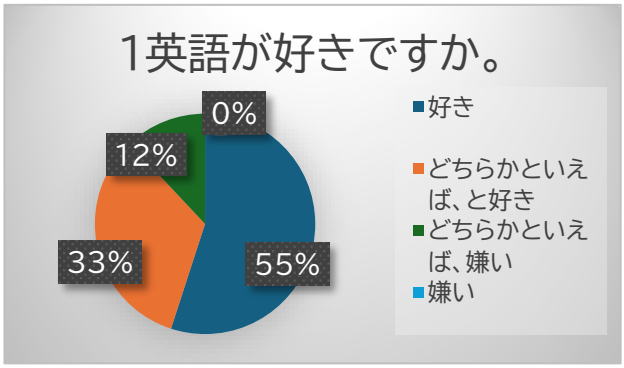
全国学力調査の大問５、大問６、大問７、そして大問８に関わる内容である。大問５は「情報を正確に読み取れる」に関するもので、文法や言語の働きを理解した上で、実際の読むことを通してのコミュニケーションにおいて、活用できる技能を身に付けていることが求められる。盛岡市の正答率は　(1) が 53.7%、(2) が 57.1%と半数以上の生徒が正答することはできていた。

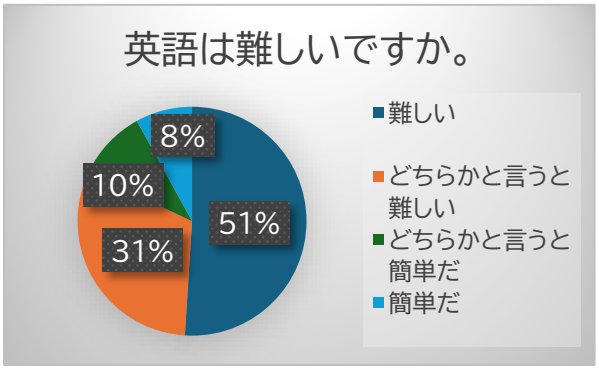
大問６は「日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断し必要な情報を読み取れる」を問うもので、目的や場面、状況に応じて必要な情報を読み取ったり、何が自分にとって必要な情報なのかを判断した上で読み進めたりすることが大切である。盛岡市の正答率は 29.9%で、書かれていることを全て読み取ろうとするのではなく、自分が必要とする情報を判断しながら読むことが求められる。

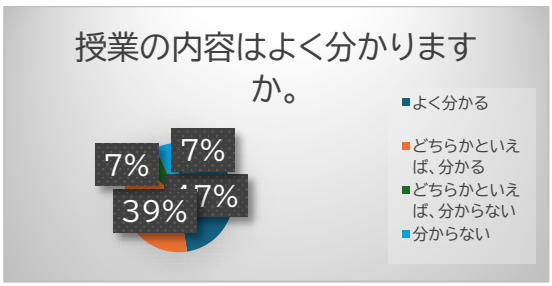
大問７は「文と文の関係を正確に読み取り、短い文章の概要をとらえる」ことに関するもので、１つ１つの文の意味をしっかりと取っていくのではなく、登場人物の行動や心情の変化や全体のあらすじなど、書き手が述べていることの大まかな内容をとらえることが求められる。盛岡市の正答率は (1) が 50.1%、(2) が 33.2%と全国平均を下回っている。(1) は 9.7 ポイント下回っており、文と文の関係性を正確に読み取る力が不足しているのが分かる。

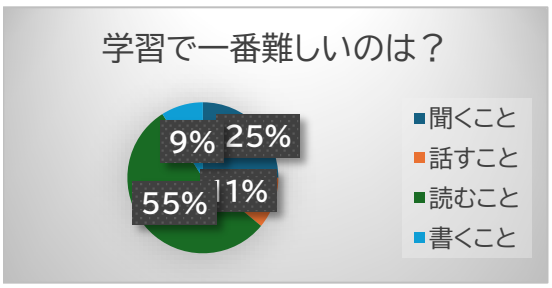
大問８は「短い文章の要点を捉えて、それに対する自分の考えとその理由を書くことができる」に関わるもので、まとまりのある文を読み、複数の情報から書き手が最も伝えたいことは何かを判断して捉えていく力が必要となる。盛岡市の正答率は (1) が 51.8%、(2) が 13.6%となっており、特に (2) は無答率も 36.7%と高く、読むことと書くことの領域統合を意識した授業展開が求められる。そこで「読むこと」に関して生徒の長文に触れる機会を増やし、ＷＰＭを活用しながら大まかな内容を把握したり、要点を捉えたりする活動を行うこととした。２学期末試験には初見教材で出題し、指導と評価の一体化を図る。

【生徒のアンケートより】 令和７年度　岩手県中学校学習定着度状況調査質問紙と４月の授業でのアンケートより









２　読むことに抵抗感をもたない生徒の育成

（１）　アンケート結果から

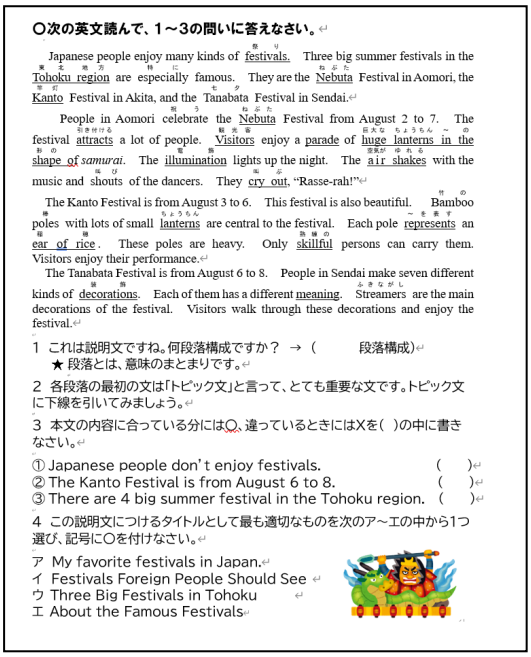
本校の生徒はアンケートにもあるように、「読むこと」に対して５領域の中で最も苦手意識をもっている。授業で取り扱う think や reading、ワーク等でしか長文に触れる機会がない生徒がほとんどである。授業でも think の概要把握に時間がかかる生徒が多いため、旧教科書にある本文や過去のテスト問題から長文をピックアップし、ＷＰＭ（ words per minute ）に取り組んだ。

（２）　ＷＰＭについて

ＷＰＭとは、１分間に読める単語数を表すもので、算出方法はＷＰＭ＝（文章の単語数）÷（読むのにかかった秒数）×６０で表す。ネイティブスピーカーの目安は平均が*２００～４００wpm、日本の中学生の平均は*５０～７５wpm と言われているため、今回の取組ではＷＰＭの目標を７０に設定し、ワークシートを用いて生徒の読解速度を可視化し、７割程度内容を把握しながら読み進める練習を帯活動の時間で取り組んだ。「読むこと」の領域では、「概要を捉えること」の育成が求められているので、初見の文章でも内容を推測して最後まで読み切る力を付けるために、新出単語のルビ（意味）をふらない語も提示した。そのことで、初見の英文に対して「全ての単語の意味を一つ一つ理解しなくても、文全体の流れをつかめること」を体験的に学ばせた。「要点を捉える力」を付けるために、トピックセンテンスや、筆者の考えや思いが書いてある文等に線を引かせる問題も設定した。

（３）　領域統合型指導について

＊日本速読力協会より



○次の英文読んで、1～3の問いに答えなさい。

Japanese people enjoy many kinds of festivals. Three big summer festivals in the Tohoku region are especially famous. They are the Nebuta Festival in Aomori, the Kanto Festival in Akita, and the Tanabata Festival in Sendai.

People in Aomori celebrate the Nebuta Festival from August 2 to 7. The festival attracts a lot of people. Visitors enjoy a parade of huge lanterns in the shape of *samurai*. The illumination lights up the night. The air shakes with the music and shouts of the dancers. They cry out, "Rasse-rah!"

The Kanto Festival is from August 3 to 6. This festival is also beautiful. Bamboo poles with lots of small lanterns are central to the festival. Each pole represents an ear of rice. These poles are heavy. Only skillful persons can carry them. Visitors enjoy their performance.

The Tanabata Festival is from August 6 to 8. People in Sendai make seven different kinds of decorations. Each of them has a different meaning. Streamers are the main decorations of the festival. Visitors walk through these decorations and enjoy the festival.

1 これは説明文ですね。何段落構成ですか？ → (　　段落構成)

★ 段落とは、意味のまとまりです。

2 各段落の最初の文は「トピック文」と言って、とても重要な文です。トピック文に下線を引いてみましょう。

3 本文の内容に合っている分には○、違っているときにはXを(　)の中に書きなさい。

① Japanese people don't enjoy festivals. (　　)
② The Kanto Festival is from August 6 to 8. (　　)
③ There are 4 big summer festival in the Tohoku region. (　　)

4 この説明文につけるタイトルとして最も適切なものを次のア～エの中から1つ選び、記号に○を付けなさい。

ア My favorite festivals in Japan.
イ Festivals Foreign People Should See
ウ Three Big Festivals in Tohoku
エ About the Famous Festivals

（英語教育において、読解力の育成は重要課題の一つである。語彙力や文構造の理解が進む一方で、読解後の表現に課題を抱える生徒が多い。そのため国の大問８を意識しＷＰＭ後に考えや理由を書かせる活動を行い表現力の向上を図った。最初は「I think ～.」の型を提示し、that 以下の文について考えさせた。回数をこなしていく中で、新しく習った言語材料を活用して文を書いたり、筆者の思いや考えを引用したりして書く生徒が増え始めた。短い文章の概要や筆者の考えを読み取れないと自分の考えも書くことができないので、段落のまとまり毎に意味を把握したり、書き手の感情や最も伝えたい所を意識し読む生徒が増えてきた。

（４）概要把握について

更に、教科書で扱う think では、概要を把握し本文内容を表すタイトルを自分で考える活動を行った。２学期のゴールが Our Project ５『日本のおすすめスポットを紹介しよう』に設定しているため、各 think のタイトルを考えさせた。タイトルを作るためにしっかりと概要把握させ、書き手が伝えたいことを最も効果的に表す１文を考えることを意識させながら取り組ませることができた。

３　各種調査結果とまとめ

（１）中間振り返りから

ＷＰＭに取り組む中で中間振り返りを行ったところ、生徒からは次のような感想が出た。

- 各段落の１文目を意識して読む。
- 読めない単語は時間をかけて考えずに、飛ばしてとにかく進む。
- 読めない単語は、飛ばして読み進めてから周りの単語から推測して考える。
- 動詞に注目して内容を理解し、分からないところは推測する。

また、「読む力を高めるために必要なこと」として、次のような生徒の記述がみられた。

- 単語をコツコツ覚える。
- わからない単語があったら、その文の全体から推測して意味を考える。
- 単語の中でも特に動詞を覚える。
- ザックリと全体の意味を取り、分からない単語は推測する。
- 一勉で読みながら単語練習をがんばる。
- 家でも長文に触れる機会を作る。毎日少しずつでもいいので増やしていきたい。

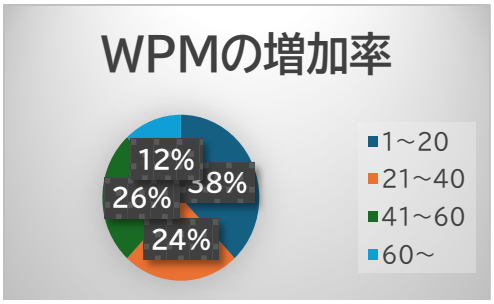
ＷＰＭの継続的な記録と中間振り返りを通して、生徒が自己の成長を実感したり、生徒の中に「自分の読み方をどう改善していくか」という意識が育ち始めた。「次はこうしてみたい」「もっとスムーズに読めるようになりたい」といった内発的な目標設定も見られた。これは、メタ認知的な気づきであり、生徒の主体的に取り組む態度の育成にもつながっていると考える。

（２）４件法による定量的調査から

	事 後 調 査　　調査日：令和７年 11 月 20 日	生徒数 45 名
	◎とても上達した　○どちらかというと上達　△どちらかと言うと上達しない　×全く上達しない	プラス評価の割合
1	**【読むこと】** まとまった英文を読む時、以前よりも、短時間に概要を捉えることができるようになった。	93％（42 名）
2	**【読むこと】** まとまりのある英語を読む時、以前よりも「要点や、筆者の伝えたい事」を意識して読めるようになった。	86％（39 名）

（３）ＷＰＭの増加率調査から

本実践研究においてＷＰＭに係る指導は、全 15 回行った。学習シートは全て教師が作成し、100 語～150 語から構成される学習材である。右にデータを示すが、21%以上増加した生徒が 62%。41%以上増加した生徒が 38%。60%以上増加した生徒は 12%であった。

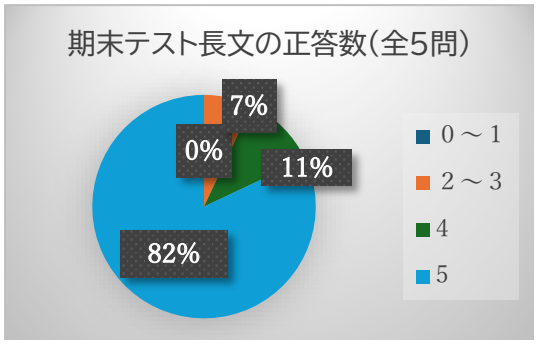


（４）文章法による定性的評価（生徒振り返り）から

- 文章問題の理解が速くなった。
- 以前よりも読むスピードが上がり、要点を捉えることができるようになった。
- 文章の大事なところを以前よりも把握できるようになった。
- 習った文法がどこでどのように使用されているか気づけるようになってきた。
- 単語練習に取り組んだおかげで、前よりも読めているような気がする。

（５）　２学期末テスト結果から

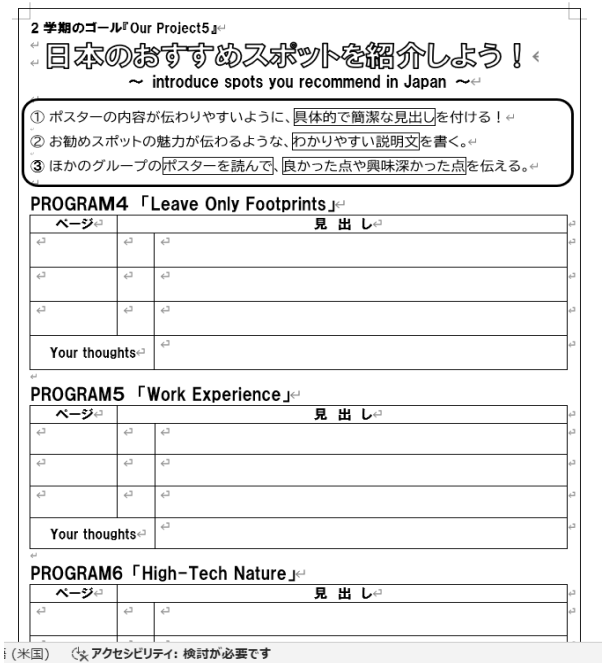
指導と評価の一体化を図るため、予め学習材、評価問題を作成し実践に当たった。総括的評価として実施した第２学期期末テストには、初見教材を出題した。５つの設問を設け実施した結果が右である。全問正解者が 82%で、５問中４問正解者を併せると 93%が４問以上正答したことになる。



3(1)(2)(3)(4)(5)により、ＷＰＭの取組は、生徒にとって読解力の「可視化」を可能にするとともに、語彙学習の必要性や多読の重要性を実感させる有効な手段となった。スタート時には「I like an apple.」のように文章の一部だけを捉えた感想や内容に合った文を書けない生徒もいたが、継続的な取組や友だちとの交流を通して要点を捉え、自分の考えや理由を書ける生徒が増えてきた。

この取組を通して、生徒の成長を実感することができたが時間確保が課題として残った。「長文が読める時はどんな時か。」という問いに対しては、「自分が知っている分野の話は読める。」という回答が多かった。多くの生徒から「たくさんの長文に触れることが大切だ」や「単語を覚えたり、書いたり練習することが大切だ。」という声が聞かれた。「書くこと」においても、簡単な英語表現を用いながらも思考の深まりと自己表現の質の向上が見られたため、アウトプット活動の重要性を感じることができた。今後も授業内容の精選を行いながら、領域統合した指導を継続していきたい。

【資料】◇ワークシート１「Our Project5」へ向けて


2 学期のゴール『Our Project5』

日本のおすすめスポットを紹介しよう！

～ introduce spots you recommend in Japan ～

① ポスターの内容が伝わりやすいように、具体的で簡潔な見出しを付ける！
② お勧めスポットの魅力が伝わるような、わかりやすい説明文を書く。
③ ほかのグループのポスターを読んで、良かった点や興味深かった点を伝える。

PROGRAM4 「Leave Only Footprints」

ページ	見 出 し	
Your thoughts		

PROGRAM5 「Work Experience」

ページ	見 出 し	
Your thoughts		

PROGRAM6 「High-Tech Nature」

ページ	見 出 し	

(米国)　アクセシビリティ: 検討が必要です

◇ワークシート２　　WPM と感想の記入

WPM (Word Par Minute)

Reand and what do you think？

◎WPM とは Word Par Minute のことで、1分間に何語読めるか？を表します。時々やっているように数値を出すには、『WPM＝語数÷読んだ秒数×60』でしたが、今回からはさらにレベルアップし、これに問題の正解数をかけていきます。『WPM＝語数÷読んだ秒数×60×正解数÷問題数』になります。
日本の中学生の平均は70と言われていますが、練習を通し100OVER をめざしてがんばりましょう。

2年　　組　氏名(　　)

	date	語数	WPM	Thoughts
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				

【参考データ】

令和７年度県学調データは本実践研究の対象外だが、関係領域の小問正答率を参考値として示す。

大問８(2)が読むことと書くことの領域統合問題である。

小問 No	県正答率	松園中正答率	対県比
7　大問５	65.1	75.0	115.2
8　大問６(1)	29.1	40.9	140.4
9　大問６(2)	45.7	47.7	104.4
10　大問６(3)	50.1	65.9	131.4
11　大問７	29.5	22.7	77.0
12　大問８(1)	41.2	54.5	132.3
13　大問８(2)	19.8	45.5	230.1

実践研究３　書くこと①

学習指導要領との関連：

○日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができる。

全国学力調査との関連：　10

１　はじめに

この問題の趣旨は、「日常的な話題について事実や自分の考え等を整理し、まとまりのある文章を書くことができる」であり、25 語以上の文章を書く問題である。

問題番号	書くことの領域 出題の趣旨	正答率		盛岡市 無答率
		盛岡市	全国	
10	日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書く	**4.6**	**7.4**	**27.1**

盛岡市の無答率は、27.1％と今回の 17 問中３番目に高かった。自分の経験や考えを書けるようになるためには、自由作文の機会を授業の中に多く設定することが必要である。その場合、「まず、正確さよりも書く内容が充実するような指導をしたい。」と初めは考えたのだが、次に示す令和５年度盛岡市の学校質問紙調査結果や正答の条件を踏まえた指導を講ずる必要がある。

【53】　「自分の考え・気持ちを英語で書く活動は行われている」が 100%と全国値を 8.1 ポイント上回っているにもかかわらず、次の結果である。

【盛岡市の現状】　正答率：　4.6%（全国　7.7%）　　対全国比：　59.7%
無答率：27.1%（全国　20.9%）　対全国比：130.0%

国の報告書によると、令和５年度の大問 10 の正答条件について、次のように示されている。

【正答の条件】　**次の条件を満たして解答している。**

① 学校生活（行事や部活動）の中から１つ取り上げている。
② 紹介する内容を一貫性のある文章で書いている。
③ 25 語以上の英語で書いている。
④ 条件①②③を満たし、正確な英語（語や文法事項等の誤りがない）で解答している。

解答類型３をみると、「条件①、②、③を満たして解答しているが、コミュニケーションに支障をきたすような語や文法事項等の誤りがあるもの」は誤答とされ、盛岡市の場合、24.3%がこの類型３による誤答とされた。つまり、**「①テーマを１つ取り上げ、②一貫性のある文章で書き、③25 語以上で書いている」のだが、24.3%に文法事項の誤りがあるため誤答**となっているのだ。このことから、正確な英語で書くことができる生徒の育成を視野に入れ授業改善に当たることとした。

２　「書くこと」のスキルアップを目指す指導の改善について

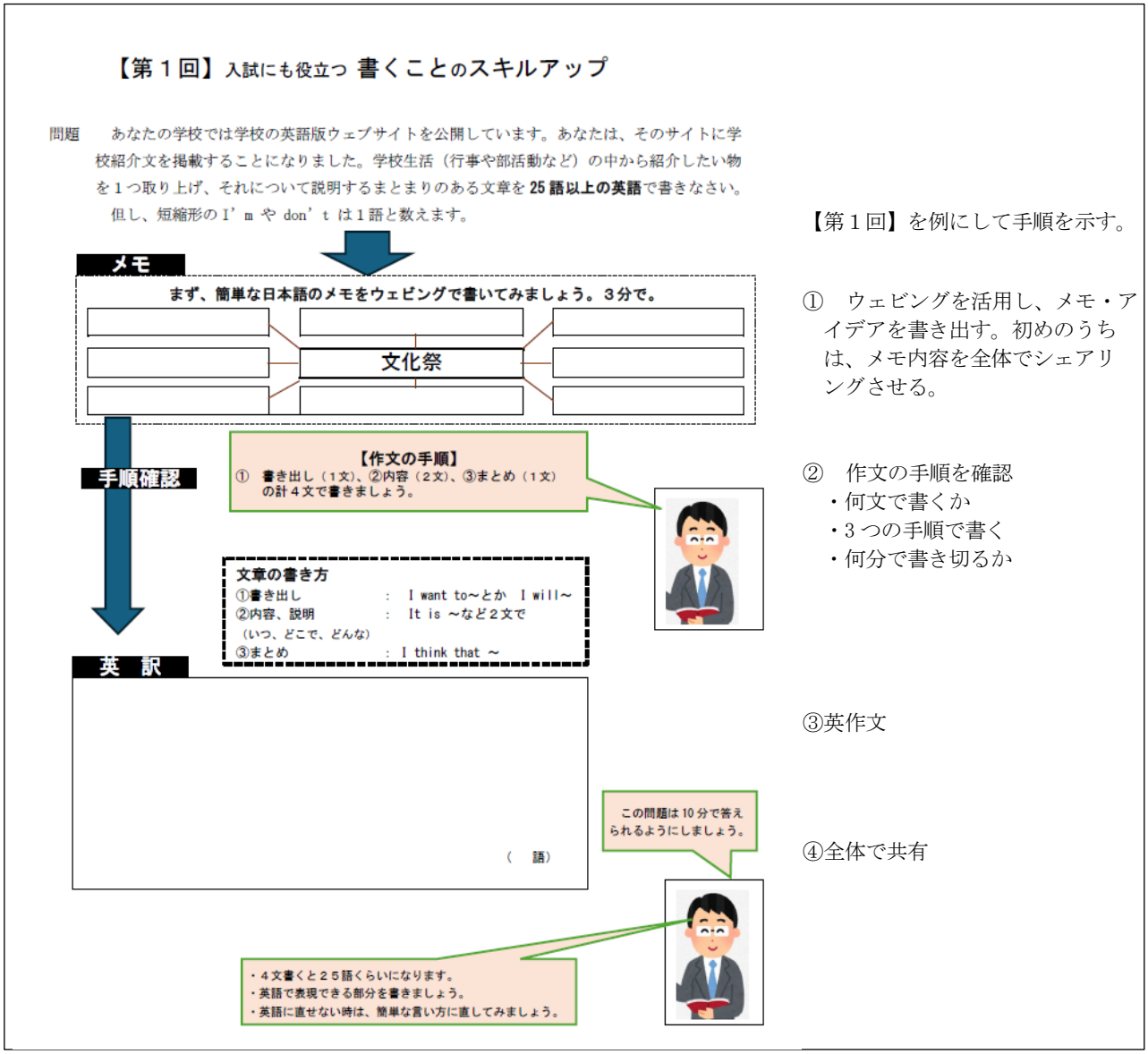
（１）　取り組み方（プランニング）

取組内容、実践研究が目指すもの、授業の場面、期待する効果、指導と評価の一体化、実践の検証方法を視野に入れ、指導構想を次のように立案した。

取組内容	○　自己表現カード６枚の作成 ○　その活用
実践研究の キーワード	・英語使用の正確さ ・言語活動→自己調整→言語活動
授業の場面	・単元末で全４回　　・時期：８月下旬～１１月中旬に月１回ペース
期待する成果	◎英語を書く時、以前よりも「メモ」→「英訳」→「表現し易い日本語に修正」→「再度英訳」の手順が短時間でできるようになった。 ◎出だしの文⇒内容文⇒まとめの文の４文を 25 語で書ける。 ◎英語を書く時、「自分の考え」を書いたら、次に「その理由」を書けるようになった。 ◎英語を書く時、以前よりも「主語＋動詞の語順」「動詞の形」「助動詞＋動詞の原形」「名詞の単数形・複数形」等を意識して書くようになった。
指導と評価の一体化	○２学期末テストに１問出題
実践の検証方法	・質問紙による事後調査 ・令和８年４月の全国調査結果

（２）指導の実際

第１回は、実際の国の調査問題を示し、①問題、②出題の条件を確認し合った上でどのような手順で表現していくかを１つ１つ指導した。シート様式についてその具体を次に示す。



【第１回】を例にして手順を示す。

① ウェビングを活用し、メモ・アイデアを書き出す。初めのうちは、メモ内容を全体でシェアリングさせる。

② 作文の手順を確認
・何文で書くか
・３つの手順で書く
・何分で書き切るか

③英作文

④全体で共有

第２回目以降については、右のような自己チェック表を入れ、生徒自身が書いた英語を自己調整できるようにした。

初めのうちは×が多かったものの、回数を重ねるごとに〇が徐々に増えていくのが見て取れた。

自己チェック〇×

1		出だし　→　内容　→　まとめ　になっていますか。
2		主語　＋　動詞　の語順になっていますか。
3		助動詞の次は、「動詞の原形」になっていますか。
4		a や　the の抜け落ちはないですか。
5		スペリングの誤りはないですか。

２学期期末テストでは、これまでの取り組んだ力が発揮できるよう、初見の英作文問題を１題出題し、指導と評価の一体化を図ることができた。

（３） 各種調査結果とまとめ

①　教師の見取りから　　〇＝成果　　△＝課題

〇生徒が英作文の書き方を覚えたことで、無回答率が減った。
〇日本語をそのまま訳すのでなく、簡単な日本語に直してから英語に直すスキルを徐々に身に付けた。
〇生徒の英作文に取り組む心理的ハードルが下がった。（苦手意識が減った）
〇シェアリングタイムを設定することで、表現内容・方法を学び合うことができた。
△生徒の冠詞や複数形に対する意識は以前より向上したが、継続的な使い分けの指導が必要。
△未履修の単語や表現については、辞書や ICT 機器が必要な場合もある。特に、下位層の生徒には予めツールの利用ルールを確認した上で使用させることも検討する。
△普段の授業に英作文指導を組み込むことが難しく計画的に重点化を図る必要がある。

②　４件法による事後調査（定量的調査）から

	事 後 調 査　　調査日：令和７年 11 月 27 日	
	◎とても上達した　〇どちらかというと上達 △どちらかと言うと上達しない　×全く上達しない	◎〇を選んだ プラス評価の割合
1	**【書くこと】** まとまりのある英語を書く時、「①メモ」→「②英訳」→「③簡単な日本語に修正」→「④英訳を修正」の手順が以前より短時間でできるようになった。	102 名中 76 名 75%
2	**【書くこと】** 25 語以上のまとまりのある英語を書く時、「書き出し」→「展開」→「結論」の順に書くことができるようになってきた。	102 名中 70 名 69%
3	**【書くこと】** まとまりのある英語を書く時、以前よりも「主語＋動詞の語順」、「動詞の形」や「名詞の前の a や the」、「助動詞＋動詞の原形」、「単数形・複数形」などを意識して書くようになった。	102 名中 64 名 63%

③　自由記述法による振り返り（定性的評価）から

【下位生徒】

- 何も書けなかったのが友達と協力して少し書けるようになった。
- まだ自力で答えることができないので、もっと慣れていきたい。
- 正しい英語を用いて、英作文を書くのは難しいと思った。文法などを覚えて練習していくことを頑張りたい。
- 完璧に書けるようになったわけではないけど、「やってみよう」と思えるようになった。

【中位生徒】

- 取り組みを始める前は何を書けばいいかなーって感じで終わって２語くらいしか書けなかったけど、全部書けるようになった。
- 記述問題の練習を授業で重ねていくごとに、やる前は自分にこんな難しいのは無理だ！と思っていたのが 25 語以上書けるようになって自分も意外とできるんだなぁと自分の技術量を理解できた。
- 25 語以上の英作文問題で名詞の前の a や the のつけ忘れや、複数形などを意識して書けていないので実力テストまでに直したいです。（２名）
- 友達と一緒に考えて、自分では分からなかったことや、書けなかったものが書けるようになった。
- 無回答だったところをしっかりと書けるようになった。
- 次の実力テストの大問 10 では、自分の言葉で伝えたい！
- 以前は全然できなかったけれど、今は自分の考えを 20 語以上は書けるようになった。

【まとまりのある英語を書く活動の様子】

- この前まではどうやって文をつなげよう…とかどうやってまとめを書くか分からなかったけど、この学習を通して友達に教えてもらって理由などを書けるようになりました。
- 前は先生に聞いたり友達に聞いたりしてばっかりだったけど、教科書などで前に習ったことを使いながら英文を書けるようになってきた。

【上位生徒】

- 英作文を通して、書く順を意識して書けました。また、少しずつ短時間でたくさん書けるようになりました。これからは、a や the を意識して書けるように力をつけていきたいです。
- 日本語を頭の中で英訳することができた。
- 「出だし・内容・まとめ」の順番通り 25 語以上で書くことがスムーズになってきた。だけど a や the をつけ忘れたり使い方の間違いがあるので直していきたい。
- 授業で英作文をたくさん書いたことで、文章の構成が前よりも上達した。次はレベルアップして「話す」ことをたくさん練習して慣れていきたい。

2(3)①②③により、まとまった英語を書くことに対する生徒の抵抗感が低減したようだ。下位の生徒から上位の生徒まで実践の効果はあったようだが、月に１回単元末等で５回指導した実践であり、指導の不十分さが定量的評価に表れている。ウェビングによる材料の洗い出しは英語で書かせるのが理想かもしれないが、２年生１学期までに指導してこなかったため、日本語で書かせることを基本とし、英語で書けるところは英語で書かせることとした。今後は、社会的事象についてまとまった文章を書かせることにも挑戦させ、語や文法に誤りのない正確な英語が書けるよう計画的に取り組ませたい。

【参考データ】

令和７年度県学調データは本実践研究の対象外だが、関係領域の小問正答率を参考値として示す。
なお、今回の実践は、県学習状況調査前に３回行ったものである。

小問番号		県正答率(%)	下小路中正答率(%)	対県比(%)
13	大問 8(2)	19.8	36.5	【副次的成果】184.8
20	大問 10(1)	40.8	60.6	148.5
21	大問 10(2)	32.9	39.4	119.7
22	大問 10(3)	22.0	29.9	135.9

実践研究４　書くこと②

学習指導要領との関連：
目標　ア　関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができる。
内容　(1) 英語の特徴や決まりに関する事項
　　イ　符号
　　ウ　語、連語及び慣用表現
　　エ　文、文構造及び文法事項
全国学力調査との関連：　9(1)①②
出　題　の　趣　旨：文法事項や言語の働きなどを理解して正確に書く

１　実践研究について

全国学力調査の大問９(1)に係るものである。9(1)①の正答率が 27.5%、9(1)②の正答率が 14.1%と低く看過できないと判断した。

正確に書くためには、語彙、表現、文法や言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けておくことが重要である。出題の趣旨は、「文法事項や言語の働きなどを理解して正確に書く」であり、同様の形式でドリル的に学習させるのが良いと考え３つのタイプのシート 12 枚を作成し取り組ませた。

２　シートのタイプについて

タイプ１	知識・技能のドリルで総合テストと同タイプ
タイプ２	語形を変化させる全国学力調査と同タイプ
タイプ３	前後の脈絡から１語をみて、文をつくる全国学力調査と同タイプ。

タイプ２、３については、英語検定や総合テスト等では見られない形式であることから国のテストを模して作成した。その際、文法事項に苦手意識のある生徒たちが取り組み易くなるようヒントを記した。また、機械的な語形変化の練習にならないよう、コミュニカティブな対話形式で提示した。シート集のうちタイプ２、３は、研究所が９月５日に市内全公立中学校にメールで送信した。

３　期待する成果と事後調査結果

文法プリントに取り組んだことで、「以前よりも文の中で動詞や形容詞を正しい形で使用できるようになった。」と「英文を読み、書き手の意見に対する自分の考え・理由を書く時に、以前よりも正しい英語を使用できるようになった。」の２つの変容の自覚を期待した。４件法による定量的調査の結果は次のとおりであり、それぞれのプラス評価は、86%と 89%であった。

	事　後　調　査　　記入日：令和７年 11 月 27 日　　生徒数：99 名				
	◎とても上達した　○どちらかというと上達　△どちらかと言うと上達しない　×全く上達しない	５ ◎	４ ○	２ △	１ ×
1	**【知識・技能】** 文法プリント（12 枚）に取り組んだことで、以前よりも、文の中で動詞や形容詞を正しい形で使用できるようになった。	39%	47%	13%	1%
2	**【話すこと・書くこと】** 文法プリント（12 枚）に取り組んだことで、英語を話したり、書いたりする時に、以前よりも正しい英語を使用できるようになってきた。	39%	50%	9%	25%

【参考データ】

令和７年度県学調データは本実践研究の対象外だが、関係領域の小問正答率を参考値として示す。

小問番号	県正答率	仙北中正答率	対県比(%)
大問 10（３）	5.3	18.7	354.9

Ⅷ　研究のまとめ

１　実践研究の成果

令和５年度全国学力・学習状況調査結果について、市の対全国比は87.7%。±５%を誤差と範囲とするなら、95%で全国値と同等と言えるが、明らかに低い数値であった。盛岡市の英語教員の指導力は低いのだろうか。この疑問から今次研究がスタートした。

国のテスト問題や小問毎の正答率や評価基準をよく見ることで、中２の３学期末までに指導すべき事項が見えてきた。その上で、４か月間という制約の中で指導と評価の一体化を実現するために必要な教材を作成し実践研究を進めた。ドリルは端末ソフトで行うことができるようなのだが、全国調査に係る弱点をピンポイントで指導するためには、研究員の手による学習材の作成が必要であった。

２　「話すこと」に係る実践研究 / 小野研究員

（１）成果

① 取組前は例文集を見ても質問できなかった生徒達が、友達と何度も練習していく中で話すことができるようになった。また、指導と評価の一体化を図ることができた。

② 質問紙調査では、事前準備をしなくても相手に質問できるようになった割合が 89%。正しい英語を使用するようになった割合が100%だった。

（２）課題

即興的に話す力の基礎となる「対話を継続する力」を育成しながら、目的、場面、状況のバリエーションを増やすとともに、読むこと、書くことのスキルの向上を図りたい。

３　「読むこと」に係る実践研究 / 竹原研究員

（１）成果

① まとまった英文を短時間に概要把握できるようになった生徒の割合が 93%。要点を意識して読めるようになった生徒の割合が86%。ＷＰＭが21%以上増加した生徒の割合が62%となった。

② 読むことと書くことの領域統合問題に取り組ませることで自己表現の質的向上が見られた。

（２）課題

今後も授業内容の精選を行いながら、領域統合した指導を継続していきたい。

４　「書くこと①」に係る実践研究 / 藤田研究員

（１）成果

① 生徒の英作文に取り組む心理的ハードルが下がった。

② 25語以上のまとまりのある英文を書く場合、４文で「書き出し」→「内容」→「まとめ」の順で短時間で書くことができるようになった。また、社会的な話題に関して読んだことについて考えと理由を書く力も副次的に高まった。

（２）課題

通常の授業に作文指導を組み込む際には、計画的、重点的に取り組ませ、他領域の力もバランスよく育成していきたい。

５「書くこと②」に係る実践研究 / 八重樫研究員

（１）成果

① 学習シート12枚を作成し取り組ませたことで、事後調査において89%の生徒が、英語を話したり、書いたりする時に正しい英語を使用できるようになったと自己評価した。

② 作成した知識・技能のシート集のうちタイプ２、３を市の研究所として市内全中学校に配布することができた。

６　今後の発展

研究員が作成した学習材を市内全中学校で共有・活用することで、国が実施する令和８年度全国学力・学習状況調査（英語）に係る盛岡市の正答率を全国値に限りなく近づけたい。

【参考文献】

① 学習指導要領、学習指導要領解説

② 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（令和２年国立教育政策研究所）

③ 令和５年度全国学力・学習状況調査報告書 中学校　英語（令和５年国立教育政策研究所）

④ 中学校学習指導要領・外国語科の改訂のポイント（独立行政法人教職員支援機構）